ヘミングウェイ文学におけるヒロインのプロトタイプ
――アグネス・フォン・クロウスキーをめぐって(2)――

日　下　洋　右

The Prototypes of Heroines in Hemingway's Literature: On Agnes von Kurowsky (2)

Yosuke KUSAKA

ヘミングウェイは8月中ベッドに臥したままであった。彼が松葉杖でようやく歩けるようになったのは、9月11日になってからのことである。1918年の秋の終わりに、ヘミングウェイの姉マーセリン(Marcelline)は、シカゴの映画館でニュース映画を見ていると、ヘミングウェイがミラノのアメリカ赤十字病院のポーチで車椅子に乗り、美しい看護婦に押されているシーンが映っているのに驚いた。

ヴィラードは1962年2月1日に、ヘミングウェイの伝記を執筆中のヘミングウェイ研究者、カーロス・ベイカーに宛てた書簡の中で、アグネスのこと、アグネスと夕食を取ることに成功したこと、ヘミングウェイとアグネスとの関係のことを、次のように語っている。

> 『武器よさらば』を読んだとき気づいたことですが、アーニー〔アーネストの愛称〕は、物語の大部分を退屈な入院中に考えついたに違いありません。もちろん、キャサリン・バークレーの中に、アグネスの姿を認めることができます。彼女は背が高く、故国から遠く離れた国ではなおさら魅力的な女性でしたし、快活で、敏速で、同情心に厚く、いたずらっぽいユーモアに溢れた女性―看護婦として理想的な女性―だったのを覚えています。患者の間では、「アギー」〔アグネスの愛称〕を連れ出せれば早く病気が良くなるというのが、いつもいわれていた冗談でしたので、私も彼女を誘い、辻馬車を駆ってマニン・ホテルでディナーを取るのに成功したときには、ひどくスリルを感じたものです。ミス・マクドナルドも患者たちの良い友人で、患者たちのために献身的に働いていました。「アギー」一人とデートする約束を取り付けるのはなかなか厄介でした。というのも、彼女と「マク」〔マクドナルドの愛称〕とは、いつも二人一緒だったからです。二人はこの病院を海外在住のアメリカ人が望むような、居心地のよい場所にしました。アーニーとアグネスとの始まったばかりのロマンスは、コメントするほどまだ発展していませんでしたね。そのうち私はこの病院を去りました。[1]

アグネスの日記によれば、ヘミングウェイがアグネスに求愛するようになった時期は、彼が入院してから1か月近く経って、二度目の手術が行われた8月10日の2週間後の頃である。ヘミングウェイが8月末までアグネスに対する求愛を抑えていたのは、ヘミングウェイとセレーナ大尉との間で結ばれた、男同士の篤い友情のためであったことにアグネスは気づいていた。

しかし、数日間ミラノを離れていた大尉が、8月24日(土)の夜に突然赤十字病院の病棟に姿を現して、8月26日(月)にミラノを永遠に去ることにしたと語ったが、その翌日ヘミングウェイがアグネスに強い興味を示し始めた、とアグネスは初めて日記に書き記している。一方、アグネスも彼女に言い寄っていたセレーナ大尉がミラノから離れた日には、二人の関係に終止符が打たれたので安心感

を得たのと同時に、彼女の方も唐突にヘミングウェイに関心の目を向け始めた。

8月から9月初めにかけて夜間の当直は、ほとんど彼女が引き受けていた。彼女は細心な看護婦であったので、他の任務を怠るようなことは決してなかった。しかし、職務上ヘミングウェイの病室へ頻繁に入ってきたし、他の患者たちが寝静まった後で、よく彼の病室へ戻ってきては彼と会っていた。ヘミングウェイはアグネスの夜勤中に、彼女にせっせと手紙を書いた。彼は夜になれば会うことができるにもかかわらず、その手紙はアグネスが午後目を覚ましたときに読めるように、昼間彼女のところへ届けられた。彼女はそれらの手紙を一通も保存していなかったし、返事も書かなかったようである。

アグネスはヘミングウェイを「坊や」（“Kid”）と呼び、自分を「坊やの奥さん」（“Mrs.Kid”）と呼ばせた。また、彼女はヘミングウェイを含め少数の人たちにしか、彼女のことを「アグ」（“Ag”）や「アギー」（“Aggie”）と呼ばせなかった。

仲間の患者たちも、間もなく二人の恋愛に気づくようになった。ある午後、ヘミングウェイが手の脈を取られていないにもかかわらず、アグネスの片手を握っている場面が目撃されたとき、彼女に夢中になっていた他の患者たちは、彼がアグネスの愛を射止めたことを認めないわけにはいかなかった。年齢差にもかかわらず、二人の間に芽生えたロマンスは、着実に進展していった。

ギプスがとれて松葉杖で病棟のあちこちを歩けるようになった8月27日㈫には、ヘミングウェイは看護婦のミス・マクドナルドを含めて、他の訪問者が彼の病室へ入ってくることに気分を害するようになった。8月30日㈮のアグネスの日記には、彼女はヘミングウェイとディナーへ出かけることを特別に許されて、ほぼ1か月半ぶりに彼を病院外へ連れ出したが、この外出を二人ともすごく楽しんだことが記されている。翌日の夕方には、ヘミングウェイがホテル・ドゥ・ルドへアグネスをディナーへ連れて行ったことが、彼女の日記に書かれている。

9月11日には、アグネスがヘミングウェイにリングを送っているので、この時期には二人の関係が新たな段階に発展したことを示している。他方、彼女がヘミングウェイにリングを送ったことは、婚約したままアメリカに残してきた医師の扱いについて彼女をいっそう困惑させ、彼女に罪意識を感じさせることにもなった。

8月末にセレーナ大尉がミラノを去ってから、アグネスとヘミングウェイの恋愛は、真剣な様相を帯びるようになったが、『武器よさらば』の中で、キャサリンとフレデリックが楽しんだ性的行為に耽るような時間は、二人にはなかったとみられる。しかし、9月7日にミス・マクドナルドは、ヘミングウェイのベッドの枕の下に、アグネスの黄色いヘアピンを一本見つけている。ヘミングウェイは女性の髪に対して生涯官能的な魅力を抱いていたので、ヘアピンの発見からこの時期にも、彼がアグネスの髪をもてあそんで楽しんでいたという推測は十分成り立つであろう。『武器よさらば』の中で、キャサリンがフレデリックの病室へ入ってくると、彼が彼女の髪を解くシーンは、この時期の経験と記憶に基づいていると推測できるかもしれない。

アグネスは感傷的になることがなかったうえに、職業意識と親密さとのバランスを注意深くとっていた。そのため、アグネスも若いヘミングウェイに興味を惹かれたが、性的な関係にまで発展することはなかったとみてよい。ヘミングウェイは現実にはアグネスとの愛を成就できなかったので、彼はアグネスと結婚して、スイスへ一緒に逃亡し、彼女が妊娠するという一連の夢を、10年後に書かれた『武器よさらば』のキャサリン・バークレーを通して実現させたのである。このようにして、ヘミングウェイはアグネスをキャサリンとして不朽の女性としたのである。その意味では、キャサリンはヘミングウェイの理想的なヒロインであったといえるかもしれない。[2]

当時の看護婦の一人シャーロット・ミラー・ハイルマン（Charlotte Miller Heilman)は、入院中のヘミングウェイを衝動的なうえに、きわめて無礼で自惚れが強く、非協力的でひどく甘やかされ

た若者と断じている。彼女はヘミングウェイのことをさらに続けて、「彼はいつもたくさん金を所持しているらしく、その所持金をイタリアワインと、それを買ってきてくれたポーターに渡すチップとに気前よく費やしていた。」[3]と語っている。

実際、ヘミングウェイがポーターに持ち込んでもらっていたコニャック、チンザーノ、ヴェルモット、キアンティなどの空き瓶が、病室の大型衣装ダンスの中に山になっていた。アグネスは大量の空き瓶をしばしば片づけたが、このような酒瓶がこっそり持ち込まれていたことは、ミス・デ・ロングの察知するところとなり、彼女の点検を受けることになった。しかし、彼女はポーターを叱責することはあっても、アグネスを叱責をすることはなかった。というのも、アグネスとヘミングウェイとの間に、ロマンスが多少進行していたことをミス・デ・ロングも感知していたからである。

9月11日までには、ヘミングウェイは右足に靴をはくことはまだ無理であったが、車椅子から離れてステッキか松葉杖をついて、街へ出歩くことができるようになっていた。彼は治療と歩行訓練のため、毎日マッジョーレ病院へ出かけていた。9月までにはアメリカ赤十字病院は、入院患者でほぼ満員になっていた。しかし、この病院の病室はドアで仕切られていたので、患者のプライヴァシーは最低限護られていた。

ヘミングウェイは両脚がかなり回復したので、9月12日のよく晴れた午後、サン・シロ競馬場へレースを見物するために出かけることになった。アグネス、それに同僚のミス・マクドナルドとミス・フィッシャーは、看護婦の正式な外出着である肩マントと山高の水兵帽を着用した。二人の若い空軍中尉ジョージ・ペイ(George Pay)とジョージ・ルイス(George Lewis)が一緒についてきた。一行は無蓋の馬車に乗って公園を抜け、郊外の別荘地の中を通って行った。彼らは競馬場の観覧席の下のバーで一杯飲み、出走馬に数リラ賭けた。儲けた人は誰もいなかったが、みなこの気晴らしのおかげで、どうやら休暇らしい楽しい雰囲気を満喫することができた。

9月の24日に、ヘミングウェイは予後休暇のため、アメリカ赤十字傷病兵運搬車隊第二分隊の操縦士であった、ミネソタ出身の入院患者ジョン・W・ミラー(John W. Miller)[4]とともに、マッジョーレ湖畔の保養地ストレーザへ向かった。二人はストレーザのグラン・ホテル・ストレーザで、10日間の休暇を過ごすことになったのである。[5] ヘミングウェイは湖畔の木陰で読書をしたり、音楽に耳を傾けたり、湖でミラーとボートに乗ったりした。また、彼はアプト式鉄道に乗ってモッタローネ山に登り、そこから一望できるマッジョーレ湖やアルプスの山々のすばらしい景観に感銘を受けた。

この休暇は、小説の中で変形されて言及されている。小説ではフレデリックの行き先は、ストレーザではなくて湖を挟んでストレーザの向かい側にあるパランツァであり、一緒に行く相手も仲間の患者ではなく恋人である。しかし、この休暇はフレデリックに黄疸の症状が出たために、史実とはちがって実現されない。

> ..... 白目が黄色くなっていた。黄疸だった。私はこの病気に罹って2週間臥せた。そのために、私たちは予後休暇を一緒に過ごさなかった。二人でマッジョーレ湖畔のパランツァへ行く予定を立てていたのだ。秋の紅葉の時期になると、そこはすばらしいところである。散策によい散歩道があり、湖上ではマスの流し釣りができる。パランツァには人があまり行かないので、ストレーザへ行くよりは好都合だったろう。ストレーザはミラノから簡単に行けるので、いつも顔見知りの人がいるのだ。[6]

フレデリックとは違って、ヘミングウェイはグラン・ホテル・ストレーザで予後休暇を過ごした。彼は10日間の予後休暇の予定を3日間早めて、9月30日にストレーザからミラノへ戻った。

彼がストレーザから戻って2週間後の10月15日(火)の朝食時に、アグネスはその日の昼の列車で

フィレンツェへ移動するようにとの命を受けた。ミス・マクドナルドがアグネスの突然の転勤の知らせを伝えるために、ヘミングウェイの病室へ飛んで行って彼を起こした。その知らせを聞いて、彼は飛び起きるとすぐ着替えをして、彼女を駅まで送ろうとした。

彼はアグネス本人が転勤を志願したのではないかと疑っていたため、ミス・マクドナルドに八つ当たりして彼女を途方に暮れさせた。アグネスは彼の理不尽な態度を諭そうとしたが、彼も悲しみの中に突き落とされて意気消沈していたので、彼に意見しようとする気持ちにはとてもなれなかった。アグネスは悲惨な気持ちのまま、雨の中を12時間にわたる惨めな列車の旅をして、夜中の12時30分に目的地に到着した。

フィレンツェからアグネスは、愛情と思いやりを率直に表現した手紙を10通ほどヘミングウェイ宛てに書き送っている。それらの手紙のなかの次のような表現は、愛情に溢れた彼女の心情をよく表していよう。

「..... あなたがいないのでとても寂しく思います。」（10月15日㈫付）[7]

「昨日列車の中であのカップルをみたとき、あなたが側にいればよかったのにと思い続けていました。そうすれば、あの素敵きなところ―私の額が埋められる窪み―に私の頭をのせて、あなたの腕に抱かれながら眠ることができますのに。」（10月16日㈬付）[8]

「.....私はあなたのことを、そしてあなたが私を愛していることをとても誇りに思っていますので、そのことをうっかり口に出したくなります。ですから、それを思わず口に出さないように、じっとしていなければなりません。」（10月21日㈪～22日㈫付）[9]

「昨夜あなたの夢をみました。.....あなたが私のそばにいてくれればよいのに。」（10月24日㈭付）[10]

「.....晴れた日もあなたがいなければがっかりしますが、あなたがいなくて私をとても寂しく思わせるのは、憂鬱な雨のときです。」（10月25日㈮付）[11]

「最初あなたの病気（黄疸のこと）を心配していましたが、キャヴィーの手紙を読みましたら、私が戻るまでにあなたの症状が回復していると請け合ってくれましたので、枕に顔を埋め、ミラノに帰ったとき、あなたにお会いできると思うと嬉しくて微笑んでしまいました。」（11月１日㈮付）[12]

「あなたがいなくてとても寂しく思いますし、とてもあなたを愛しています。あなたがストレーザから戻ってきて、エレベーターから降りたときのあなたの姿を先日の夜ありありと思い出しました。」（11月２日㈯付）[13]

それらの手紙の末尾に記された親愛の情のこもったアグネスの署名も、おそらく当時よりも今日みるとずっと親密な調子を伝えているであろう。

「私の心からの愛をこめて、いつも変わらぬあなたのアグネスより」（10月16日㈬付）[14]

「変わらず愛しています―いつまでも―アグネスより」(10月17日㈭付)[15]

「貞節なあなたの若妻より」(10月22日㈫～23日㈬付)[16]

「あなただけのもの―アギーより」(10月24日㈭付)[17]

「お休みなさい、愛しいあなた、あなたの若妻より」(11月3日㈰付)[18]

このような親密で愛情に溢れた短い表現は、二人が離ればなれになったために、おそらくアグネスの感情を大胆にしたことを示しているといえるかもしれない。換言すれば、このような愛情深い表現は、アグネスが二人の恋愛関係の現実そのものに熱中したというよりも、むしろ二人の恋愛関係から想像されたイメージに熱中していたことを示しているといえるかもしれない。

アグネスは10月16日から、フィレンツェで奉仕活動に従事していたが、11月11日にミラノへ戻った。流感から回復して1か月の病気療養休暇を与えられた、同僚の看護婦エルシー・ジェサップを一緒に連れていた。彼女はアグネスを支援するため、フィレンツェへ派遣されていたのである。ミス・ジェサップは、背が高く、長いブロンドの髪を丸くまとめ、物腰が幾分英国風であり、外出するときにはフィアンセのものであった軍人用のステッキを持ち歩いていた。彼女のフィアンセのイギリス人将校は、4月以降戦闘中に行方不明になったままであった。アグネスにとって、彼女は「自由奔放で独立心が強く、好奇心をそそられる人物」のように思われた。彼女はタバコを大量に吸い、非番の日用に自分のペンションを所有していた。

ミス・ジェサップは背が高く、髪がブロンドで、物腰が英国風であることに加えて、彼女が軍人用の杖を持ち歩き、イギリス出身とされている点から、『武器よさらば』のヒロイン、キャサリン・バークレーの人物像の形成に、ある程度貢献しているといえるかもしれない。

キャサリンの人物像の創造にヘミングウェイのアグネスにまつわる想い出が、どの程度影響を与えたのかということは、アグネスの生涯を語るときに議論の的になる避けて通れない問題の一つである。アグネス自身はミス・ジェサップが、キャサリンの性格描写の大部分の原型であったと主張している。[19] しかし、ミス・バークレーの人物像に重要な貢献をしているのがアグネス自身であることは、疑問の余地がないであろう。アグネスがミス・バークレーと正確に重なる人物でなかったことは認めざるをえないが、アグネスが存在しなかったとすれば、キャサリン・バークレーが創造されなかったことは間違いないとみてよい。

アグネスが約1か月間ミラノを離れていた間に、イタリア軍はヴィットリオ・ヴェネトの戦いで、オーストリア＝ドイツ同盟軍を打ち破っていた。イタリアでは、11月4日に休戦協定が発効した。西部戦線で休戦協定が調印されて戦争が終結したのは、11月11日のことであった。アグネスがミラノに滞在中、ヘミングウェイと一緒に数時間過ごすことができたが、そのときには、二人はエルシー・ジェサップとよく連れ立って、公園を馬車に乗ってドライブしたり、競馬に出かけたりした。

アグネスはミラノに戻って10日後の11月21日に、ミス・キャヴァノーと一緒に、再びパドヴァ東部のトレヴィゾにある野戦病院へ転属を命じられた。トレヴィゾのアメリカ歩兵部隊の間で、伝染病が猛威をふるっていたからである。彼女の担当した病棟に備えられた48台のベッドは、ほとんどいつも満員であった。若者たちの何人かが肺炎で亡くなっていた。彼女は過酷な条件下で長時間働いたが、その間ほぼ隔日ごとにヘミングウェイに便りを書き続けた。

アグネスのトレヴィゾからの手紙の内容には、フィレンツェからの手紙の内容とは著しく異なる面が認められる。相変わらず恋人が側にいないので、寂しい思いをしているという内容の手紙(11月

25日(月)付、11月28日(木)付、11月30日(土)付）の他に、恋人の訪問を楽しみに待っている気持ちを表した手紙がみられるからである。彼女の期待に応えて、ヘミングウェイから間もなくそちらへ訪ねて行くかもしれないと伝える手紙が彼女のもとに届けられた。彼女は彼の手紙に対する返事の中で、彼の訪問が待ち遠しい気持ちを伝えている。「私はいつも窓の外を眺めていますわ。そして、時折よく似合う英国の軍服と外地用の軍帽を身に着け、杖を携えたよく見慣れた頑丈そうな人影が見えたような気がして跳び上がっています。とても変な話でしょう。でも、何度も間違えてがっかりしているのです。」[20]

おそらくアグネスの期待に応えて、12月９日の月曜日の午後に病棟の中を杖をつき、足を引きずるようにしてヘミングウェイが突然姿を現した。ベッドに寝そべってタバコをふかしながら、ポータブルの蓄音機を鳴り響かせていた回復期にある兵士たちは、ヘミングウェイの格好と物腰をみて大笑いした。というのも、彼が杖をつき、すべての勲章をつけた軍服を着て入ってきた姿をみて、ベッドの兵士たちはみな彼のことをふざけていると思ったからだった。

その日ヘミングウェイとアグネス、それに彼がミラノの将校クラブで知り合ったヘイ(Hay)中尉という人物と、そのガールフレンドの看護婦ガートルード・スミス(Gertrude Smith)の四人は、戦場となっていた廃墟を訪ね、以前のオーストリア軍の塹壕を見学してから、ヘミングウェイがミラノへ戻る旅をする前に、真夜中ではあったが早い朝食を取った。ヘミングウェイとヘイは、夜中の１時頃ミラノへ向け出発した。

ヘミングウェイのトレヴィゾ滞在中、彼が直ちに帰国して生活費を稼ぎ、その後でアグネスが帰国して彼と結婚することに二人は同意していたとみられる。その結果、ヘミングウェイのトレヴィゾ訪問後、アグネスの手紙の内容は、二人の将来について肯定的であり、二人の結婚についても、ヘミングウェイを勇気ずけるものになったとみてよい。しかし、そのためヘミングウェイに深刻な問題が新たに浮上した。それはヘミングウェイが一足先に帰国して、二人のために生活費を稼ぎ、最低限の資金を貯えて、アグネスの帰国を待たなければならなくなったということである。このように、ヘミングウェイはトレヴィゾのアグネスを訪れた後、彼女の忠告に従ってヨーロッパに留まって放浪せずに、できるだけ早く帰国して、アグネスとの結婚に備えようとしたのである。

この決心は長年の友人ビル・スミスにも知らされた。アグネスも貧しいけれども一緒に生活できればすばらしいことだといっているので、彼は１月４日にジェノヴァから出航してアメリカへ帰国し、そこで仕事に就くつもりである、とヘミングウェイはビルへの手紙の中で語っているからである。加えて、同じ手紙の中で彼は、結婚式ではビルに新郎の付添人になってもらうことまで早々と依頼していた。したがって、この時点ではヘミングウェイが、二人の結婚の同意に全く疑問を抱いていなかったことは明らかである。

12月16日(月)付けのアグネスの手紙の中で、ヘミングウェイの帰国の唐突な知らせにやや大げさな表現で言及されているので、彼のトレヴィゾ訪問から16日までの間に、彼が帰国を決断し、その期日を彼女に知らせたと推測される。

「あなたのニュースにいささか驚きました―帰国することについてです。」[21]

フィレンツェからの手紙と著しく異なるもう一つの点は、アグネスの手紙の中で、ヘミングウェイとの結婚に明確に言及されていることである。アグネスは二度にわたってトレヴィゾからの手紙の中で、二人の結婚のことを話題にして、ヘミングウェイに彼女との結婚を期待させている。

「こちらで結婚できればいいのにと思うことがありますが、それはとても愚かなことなので、

そのことを考えないようにしなければいけないわ。」（12月１日㈰付）[22]

「私が自分よりも若い男性と結婚する予定です、と母親に手紙を書きました。」(12月13日㈮付)[23]

目前に迫った18年のクリスマスは、二人にとって初めて過ごす祝日であったので、アグネスはヘミングウェイへの手紙の中で、二度にわたって一緒にクリスマスを祝うために、ミラノへ帰ることを希望していると彼に告げている。ヘミングウェイから帰国のことを知らされた手紙に対する12月16日付けの返事の中で、アグネスは「クリスマスのためにミラノへ本当に戻りたいわ。さもなければクリスマスが惨めな日になるでしょう。」[24] と記しているからである。

しかし、ヘミングウェイが帰国のことを伝えた12月16日以降の彼女の手紙では、週末後には病院が彼女を必要としなくなるでしょう、と期待を抱かせる言い方をしたかと思うと、次の日には患者がクリスマスまではこの病院から移されないらしいとか、将校たちから看護婦たちに留まってもらって、病院を楽しい心安まるところにしてほしいといわれたなど、と彼女は語って捕らえどころがない。このようにして、彼女は言い逃れをしようとしているというよりも、むしろ自己の本心を語ろうとしていないように思われる。その結果、アグネスがクリスマス時期にミラノへ戻ることは、実行に移されることがなかったのである。

また、結婚を約束をした恋人の帰国の時期が知らされていたにもかかわらず、アグネスにはクリスマス休暇時にミラノへ一度戻って、彼と最後の別れを惜しみ、再会を誓い合おうとする意思はみられない。このような態度は、ヘミングウェイがギャンブル大尉に寄食して、ヨーロッパを放浪することを回避させる手段として、アグネスが二人の婚約に同意したに過ぎず、結婚が彼女の本心ではなかったので、彼女がミラノで彼と再会することを避けようとしたことから生じた可能性が高い。

彼女は27歳の誕生日が１か月以内に訪れるにもかかわらず、ヘミングウェイの20歳の誕生日は、７月まで訪れないことの意味を十分承知していたであろう。ちょうど彼女がベルヴュー病院のフィアンセＳ医師を捨てたように、二人の年齢差は、将来ヘミングウェイが彼女を捨てる要因になりかねないという不安から、彼女はヘミングウェイとの結婚に踏み切ることができなかったとみられる。ヘミングウェイに対する関心は変わらなかったものの、彼女は彼との結婚よりも、むしろ看護婦としての奉仕活動を海外で今後も継続して行きたいということが、彼女の本心であったとみてよい。

休戦協定から間もなくのこと、ヘミングウェイは移動式売店当時の上司であった、36歳になるジム・ギャンブル大尉から一通の手紙を受け取ったが、それはシチリア島のタオルミーナから書き送られてきたものであった。その手紙は大尉が借りていた「イギリス人画家所有の庭付きの小さな家」の快適さと、「話し相手が欲しい」旨を伝えていた。[25] ヘミングウェイはギャンブル大尉が世慣れていて、裕福であったことに感銘を受けており、二人はひじょうに仲の良い関係にあった。

そのため、大尉は１年間ヘミングウェイを財政的に援助するので、冬期間マデイラ島とカナリア諸島で一緒に過ごし、それからイタリアに住んでヨーロッパを旅行しようと申し出た。ヘミングウェイはこの寛大な申し出を受け入れたいと思っていた。しかし、アグネスは彼が年輩者や金銭に容易に誘惑されることを見抜いていたので、彼が経済的援助によって堕落することを怖れて、彼に大尉の申し出を断るよう忠告していた。[26] 1971年のレノルズとのインタヴューの中で、アグネスはこのときのことを想い出して次のように語っている。

この方〔ギャンブル大尉〕は、戦争が終ったらヘミングウェイと旅行したいと考えていた人です。私はヘミングウェイを帰国させました。そのため、彼は私を憎んでいました。もし費用を一切他人にまかせて旅行などしたら、あなたは先ずのらくら者にしかならないわよ、と私は彼にいっ

てやりました。私は彼の恋人としては年上過ぎること、また彼はもっと世間を知るべきだと彼に手紙を書いてやると、彼はひどく腹を立てました。.....彼は大尉の招待を受け入れたことでしょう。でも、彼のためになったとは思いません。そこは若者の行くべき所でないのです。もし行っていたら、本当にいい加減な人間になってしまったでしょう。彼はのらくらした男になる資格が十分でした。ヨーロッパを離れることは、たやすいことではありませんでした。ギャンブル大尉は、彼に大変好意を抱いていましたし、金回りもよかったからです。おそらくヘミングウェイは、何一つ心配する必要がなかったでしょう。私は感じたと思います—多少とも、彼の面倒をみなくてはいけないと。私は彼に夢中になったとは思いません。彼はとても魅力的な若者でした。ウィットに富み、話し相手にはもってこいの人でした。でも、私がそうなったとは思いません—私がそのとき止めていなかったら、彼は例のヨーロッパ旅行へ出かけてしまっただろうと思います。[27]

ヘミングウェイは18年のクリスマスの直前まではミラノに留まっていたが、アグネスがクリスマス期間中にミラノへ戻らないことがわかると、ギャンブル大尉の要請に応じて、シチリア島へ出立することを決心したとみられる。ミス・デ・ロングは「あなたの恋人はここに滞在中ですが、明日はすてきな旅に出かけるつもりですよ。」、とアグネスに知らせているからである。「すてきな旅」は、疑いもなくタオルミーナへの旅のことを意味していた。

アグネスの懸念にもかかわらず、18年のクリスマスから、19年の新年が始まったばかりの時期にかけて、ヘミングウェイはタオルミーナ滞在中のギャンブル大尉を訪問するため、ミラノから南へ向かう列車に乗り込んだ。彼のタオルミーナ訪問は、楽しい想い出になったはずである。彼は大尉が借りていた別荘を訪れたにもかかわらず、それを認めようとはしなかった。19年１月１日頃、ヘミングウェイがミラノに戻ったとき、彼は友人のイギリス人砲兵将校ドーマン＝スミス(Dorman-Smith)に、その途方もない旅行談を語って聞かせている。

彼は帰ってくるなりこういいました。シチリアはどこも見なかった。見たのは寝室の窓だけだった。というのも、最初に宿泊した小さなホテルの女主人は、彼の衣服を隠してしまい、一週間彼を独り占めにしたからだ、というのです。運ばれた食事はすごくおいしいし、女主人の態度も愛情に溢れていたというのです。ヘム〔ヘミングウェイの愛称〕は何も不満がなかったが、あちこち見物できなかったのが、ただ一つ残念なことだったというのです。ヘムはアグに何を話したのか私は知りません。[28]

ギャンブル大尉の招待のことについては、事前にアグネスから忠告を受けていたためか、ヘミングウェイは彼女にシチリア島への旅のことを何も語らなかった。しかし、この旅行談は虚構の中で、リナルディ中尉とのアイロニカルで、コミカルなやりとりの形で再現されている。

「汚いなあ」彼〔リナルディ中尉〕はいった。「きれいに洗ってこいよ。どこへ行って、何をしてきたんだ。何もかもすぐ話せよ。」

「いろんな所へ行ったさ。ミラノ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、ヴィラ・サン・ジョヴァンニ、メッシーナ、タオルミーナ—」

「列車の時刻表のようないい方だね。美しい冒険なんかなかったのかね。」

「あったとも。」

「どこでだ。」

「ミラノ、フィレンツェ、ナポリ—」

「もういいよ。本当に、最もよかったところはどこだったんだい。」
「ミラノさ」[29]

ヘミングウェイがシチリア島へ旅行したことは、間違いないとみてよいであろう。[30] しかし、ヘミングウェイはアグネスの強い説得によって、ギャンブル大尉が提案していたマデイラ島とカナリア諸島で過ごすことも、イタリアに滞在してヨーロッパを旅行することもしなかった。1918年12月11日(水)付けの家族宛ての手紙の中で、ギャンブル大尉と一緒にしばらくの間マデイラ島とカナリア諸島へ出かける予定であったが、そこへ旅行して寄食生活をすれば帰国できなくなることを悟った、とヘミングウェイは語っている。大西洋のこちら側を訪れる機会は、二度とないかもしれないので、彼はヨーロッパに留まってしばらくの間放浪したいと思ったが、帰国してしばらく家族と再会してから、アグネスと結婚するために、仕事につかなければならないことを認識したと家族に伝えている。

ヘミングウェイの帰国が目前に迫った、18年12月31日(木)付けのアグネスの手紙には、以前のように寂しさと深い愛情を素直に表現した、従順でロマンティックな恋人の面影はもはや認められない。彼女は感情の起伏の激しい若者を諭す、年輩としての現実的な女性あるいは看護婦に戻っている。レディの面前でかみタバコをかまないこと、派手なネクタイをつけないこと、香水や頭髪ごてやつま楊枝を使用しないこと、と彼女は彼に対する実際的な忠告をわざわざ具体的に箇条書きにして伝えているからである。

翌日付けの手紙は、二人の将来を左右する内容を含んでいるので、前日の手紙以上に注目する必要がある。アグネスはこれまでヘミングウェイに帰国を強く促してきたにもかかわらず、アグネス自身は帰国に熱心でないことを打ち明けて、二人の前途がヘミングウェイの期待通りに進みそうにないことを予示しているからである。「あなたがヨーロッパに留まらないと私に約束したので、私はどうしも帰国しなければならないわ。」、[31] とヘミングウェイのせいで帰国の義務が不承不承背負わされたかのような言い方をしていることに加えて、アメリカへ帰国後の看護活動は、きわめて退屈で面白味のないものになりそうなので、帰国する気持ちには少しもなれない、と彼女は本音を漏らしている。この時点で、ヘミングウェイは彼女の本心に気づき、二人の結婚は彼の思い通りになりそうにない可能性が大きいことを見抜くべきであった。

ヘミングウェイがアグネスと最後に会ったのは、18年12月９日のトレヴィゾであったというのが定説である。しかし、二人が貴重な時間を過ごしたのは、ヘミングウェイがトレヴィゾを訪れたときだけではなかった可能性がある。ヘミングウェイのイタリア出発後に書かれた、アグネスの手紙の中で何気なく触れられた一箇所は、二人の最後の別れに先立って、二人がパドヴァで会っていたことを示唆している。というのも、ヘミングウェイが帰国後の1919年１月21日に、トッレ・ディ・モストからヘミングウェイ宛てに出された手紙の中で、アグネスは二人がパドヴァで写真を撮ったときのフィルムのことにさりげなく言及しているからである。「今日は私がここへきて以来最初の交替日でしたので、私たちがパドヴァで写し始めたあのフイルムをすべて写し終えることができました。」[32]

1919年の１月９日(土)付けの手紙の中で、アグネスはヘミングウェイがイタリアを出発する直前に、彼女に送っていた数枚の写真の礼を述べている。同じ手紙の中で、アグネスは母親と友人に自分の映った写真を送りたいので、ヘミングウェイが彼女に送った手紙に同封した写真のネガをひどく欲しがっている。これらの写真は、彼女がミラノに滞在していた11月11日から21日までの期間に撮られたものとみてよい。11月11日から21日までのアグネスのミラノ滞在時期から推測すれば、1919年１月21日付けのアグネスの手紙の中で言及されている、パドヴァで二人が過ごした時期は、二人が

最後に会った日として定説になっている、18年12月９日からクリスマス前までの時期の可能性も十分ありえよう。

また、二人が初めて過ごすことになるクリスマス時期にも、名残りを惜しむべき恋人の帰国時にも、アグネスがミラノに戻ってヘミングウェイと再会することがなかったとする見方は、ヘミングウェイ研究者の間では周知の事実である。ところが、アグネスは１月５日にミラノのレアーレ宮殿で開催された、ウッドロー・ウィルソン(Woodrow Wilson)大統領[33]夫妻の歓迎会に出席したときの様子を書き記した手紙を、1919年１月６日㈬にオーク・パーク宛てに送っている。

もしヘミングウェイがシチリア島のタオルミーナからミラノに戻った１月１日頃から、彼が赤十字病院を退院した１月４日までの間に、二人がミラノで会っていなかったとすれば、アグネスが１月５日にミラノに滞在していたことをヘミングウェイにわざわざ知らせるであろうか。もし二人がミラノで会わず、ヘミングウェイの帰国後にアグネスだけがミラノに戻ったことが事実だったとすれば、ヘミングウェイに対するこれほどの裏切り行為はなかったであろう。したがって、この時点でヘミングウェイは立腹し、アグネスと絶交していたであろう。

ヘミングウェイにそのような反応がなかったことからみて、二人は新年のごく短い期間にミラノで会っていたとみるべきであろう。その後、アグネスはウィルソン大統領夫妻の歓迎会に出席するため、ミラノに引き続き滞在していたとみるのがきわめて妥当な見方であろう。二人がミラノでごく短期間であれ、最後の別れを惜しんだからこそ、彼女は何の遠慮も躊躇もなく、大統領夫妻の歓迎会に列席したことにヘミングウェイ宛ての手紙の中でわざわざ言及したとみてよい。[34]

1919年１月４日に、ヘミングウェイは５か月半にわたって入院していた、ミラノのアメリカ赤十字病院を退院した。ヘミングウェイはアグネスが彼の後を追ってアメリカへ帰国し、二人が結婚することになるであろうと期待しながら、１月４日にはミラノを発ち、５日にはジェノヴァからジュゼッペ・ベルディ号に乗船してニューヨークへ向かった。彼は１月21日にニューヨークに到着した。

それ以後二人の歩む道は交差したことがあったにもかかわらず、二人は会うことがなかったのである。1923年にヘミングウェイがカナダのトロントへ戻ったとき、アグネスはニューヨーク市で個人経営の看護婦をしていた。二人に再会する機会があったとすれば、二人の人生の中でこの時期が唯一の機会であったとみてよい。しかし、この時期にヘミングウェイは、トロントの新聞の記事を取材するために、ニューヨークへ少なくとも二度出向いているが、二度とも二人は会っていない、とアグネスは主張している。

ヘミングウェイがイタリアを去って以来、二人が二度と会うことはなかったものの、二人の文通は続いていた。ヘミングウェイが帰国途中の19年の１月７日㈭と９日㈯には、アグネスは派遣されていたパドヴァからヘミングウェイ宛てに手紙を書き送っている。19年の１月12日㈫から３月初旬までのアグネスの手紙は、彼女がミス・キャヴァノーと一緒に派遣された、トッレ・ディ・モストから送られたものであった。

彼らが派遣された地域一帯は、砲撃を受けたために荒廃しており、住民の大部分は家を失い、飢えに苦しむという悲惨な状況にあった。11床からなる病院は、オーストリア軍の司令部と病院とがあった跡地に置かれ、彼らの他にイタリア人看護婦が２名配置されていたにすぎなかった。アグネスたちは、訪問看護や緊急看護から食事の世話までしなければならなかった。

この頃のヘミングウェイに宛てたアグネスの手紙には、将来に対する不安と将来の生き方に悩んでいる様子が垣間見られる。

「将来は私にとってむずかしい問題です。どう解決したらよいのかわかりません。帰国した方がよいのか、さらに海外勤務を志願した方がよいのか、今それが問題です。もちろん、これは近い

将来の問題にすぎないことは、あなたもご存知と思います。私が次期の計画を立てることに、おそらくあなたはお手伝い下さるでしょうから。キャヴィ〔キャヴァノーの愛称〕は、この頃私にとても冷たくなりました。私を浮気な女だと責めるのです。そのため、私はルース・ブルックスのようなふしだらな女の部類に入れられそうです。私がそんなことするわけないのにね。」(1919年2月3日(日)付)[35]

「外国での生活も、日に日に好ましくなってきました。ミス・コンウェイが私の運勢を占うたびごとに、私はあちこち旅行するだろうと予言しています。このことをどう思いますか。お休みなさい、あなた。くたびれても明るいあなたのアギーより。」(1919年2月5日(火)付)[36]

アグネスによると、ヘミングウェイがヨーロッパを離れたのは、そうすれば彼女がすぐ彼の後を追いかけてきて、二人は結婚するだろうと考えたからだという。彼女には彼と結婚しようとする意思よりも、むしろ彼をヨーロッパから帰国させなければならないとする思いの方が強かった、と彼女は主張している。ヨーロッパに留まっていれば、彼は間違いなく堕落するであろう、と彼女は確信していたからである。このような説明を聞くと、彼女はいささか自己犠牲的過ぎるように思える。おそらくこの態度は、二人の関係が彼女の望んだ以上に厳しい状況になっていたことを示しているのかもしれない。

アグネスの手紙を読む限り、ヘミングウェイがイタリアに滞在していた最後の半月間、アグネスは彼との再会を避けていたのではないかという疑問が拭い切れない。ヘミングウェイは本人の帰国がアグネスの帰国を促して、二人が結婚することになるものと期待していた。しかし、その期待とは裏腹に、アグネスはヘミングウェイを帰国させることによって、事実上二人の親密な関係にピリオドが打たれることを内心確信していたとみてよい。 アグネスが近況報告や将来の進路に関して、不安に包まれた手紙を帰国後のヘミングウェイに書き送っていた頃、彼女とイタリア公爵領の相続人、ドメニコ・カラッチョロ(Domenico Caracciolo)中尉との間に、新しい関係が始まろうとしていた。1919年3月1日付けのアグネスからヘミングウェイに宛てた手紙は、自己を卑下する言い方をしながら、消極的な形で二人の関係に終止符が打たれようとしていることを示唆している。

「ああ、私はどんどんいやな女になってゆくわ。日に日にだめになってゆくみたい。一つだけはっきりしています。私はあなたが考えているほど完全な女じゃないことです。

これまでいつもそうでしたが、今それが少しずつはっきりしてきただけのことです。

今夜はひどく惨めな気分ですので、このへんでお休みなさい、あなた。くれぐれも性急なことをなさらないで、楽しくお過ごし下さい。」

愛するアギーより[37]

ヘミングウェイはこのアグネスの手紙の行間に、近づきつつある破局の兆候を読みとっていたに違いない。

注

1．Baker　47．　Reynolds　200．
2．アグネスがヘミングウェイを捨てたことは、「虚構の中で従順なキャサリンが主人公の恋人となり、出産時に死亡して『罰を受ける』。」とする見方もある。Meyers　41．
3．Reynolds　195．

4．ミラーも敵の砲火の中で、負傷兵を救助した武勲のため勲章を授与された。8月30日に肺炎のため入院した。James R. Mellow, *Hemingway: A Life without Consequences* (Reading, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company, 1994) 74.

5．この休暇期間を一週間とする研究者が多いが、10日間が正しい。ストレーザで休養中の18年9月26日の両親宛の手紙の中で、ヘミングウェイは10日間の休暇を取っていると伝えているからである(Villard and Nagel 184)。ストレーザでは、100歳になろうとするイタリアの外交官エマヌエーレ・グレッピー(Emanuele Greppi)伯爵と会って政治を語り、ビリヤードを競っている。グレッピー伯爵は、虚構中のグレッフィ(Greffi)伯爵のモデルとされた人物である。また、18年9月29日付けの両親宛ての手紙によると、ストレーザではヘミングウェイは伯爵の他に、トリノ出身のピエール・ヴィンセンツォ・ベッリア(Pier Vincenzo Bellia)夫妻と三人の娘に会った。ベッリア一家はヘミングウェイを息子のように待遇し、クリスマス休暇をトリノで過ごすようにヘミングウェイを招待した。両親宛ての手紙の中では、三人の娘との関係についてそれ以上言及されていないが、ヘミングウェイが三人の娘のうち、末娘のビアンカ(Bianca)に結婚を申し込んだという説がある。最初彼女はプロポーズを断ったが、後に考え直してプロポーズを受け入れることにした。しかし、そのときにはヘミングウェイは帰国した後であったので、彼女の父は彼と接触できず、二人の結婚は実現しなかったといわれる。カーロス・ベイカーはこのエピソードに肯定的であるが、マイケル・レノルズは否定的である(Denis Brian, *The True Gen: An Intimate Portrait of Hemingway by Those Who Knew Him* (New York: Grove Press, 1988) 24-25)。

6．Hemingway, *A Farewell to Arms* 142.

7．Villard and Nagel 99.

8．Villard and Nagel 99.

9．Villard and Nagel 107.

10．Villard and Nagel 111.

11．Villard and Nagel 113.

12．Villard and Nagel 121.

13．Villard and Nagel 123.

14．Villard and Nagel 100.

15．Villard and Nagel 101.

16．Villard and Nagel 110.

17．Villard and Nagel 111.

18．Villard and Nagel 125.

19．Villard and Nagel 44.

20．Baker 54-55.

21．Villard and Nagel 143.

22．Villard and Nagel 135.

23．Villard and Nagel 140.

24．Villard and Nagel 143.

25．Reynolds 204.

26．アグネスはギャンブル大尉の誘いの根拠が、ヘミングウェイを同性愛へ誘惑することにあったと感じていた可能性がある。Meyers 40.

27．Reynolds 204.

28．Reynolds 204-205. Baker 56.

29．Hemingway, *A Farewell to Arms* 11.

30．ヘミングウェイはギャンブル大尉と酒を酌み交わしながら、楽しく語り合ったり、はるか遠くで煙を吐くエトナ山を眺めながら、地中海の月下の浜辺を散策したりした。ヘミングウェイは大尉から、二人のイギリス人画家、イギリス人少佐とその妻、ネルソン提督の子孫といわれているブロンテ（Bronte）公爵などに紹介された。Mellow 84.

31. Villard and Nagel 149.
32. Villard and Nagel 158.
33. ウッドロー・ウィルソン(1856-1924) 米国の政治家（民主党)。第28代大統領(1913-21)。十四箇条の平和原則を発表(1918)。国際連盟創設に尽力。ノーベル平和賞を受賞(1919)。
34. ジェイムズ・メロウは、1918年の大晦日から19年の新年にかけて書かれたヘミングウェイ宛てのアグネスの手紙を綿密に読んでみると、彼がイタリアからアメリカへ出航するちょうど前の12月31日に、二人がミラノで最後の逢い引きをしたことが事実であることを明らかに示している—事実、アグネスの手紙はミラノで書かれた—と語っている（Mellow 85)。しかし、18年の12月31日と19年1月1日に書かれたアグネスの手紙を詳細に読んでみても、二人がミラノで最後に会った証拠を見出すことができない。しかも、ミラノで書かれたとされるアグネスの手紙も、1月6日付けのものである。スコット・ドナルドソンもヘミングウェイが19年1月6日にジェノヴァからニューヨークへ出航する前に、最後の再会を果たしたと述べているが、根拠を全くあげていない(Scott Donaldson, *Hemingway VS. Fitzgerald* (New York : The Overlook Press, 1999) 41)。
35. Villard and Nagel 159.
36. Villard and Nagel 160.
37. Villard and Nagel 162-63.

参考文献

1. Baker, Carlos. *Ernest Hemingway : A Life Story*. New York : Charles Scribner's Sons, 1969.
2. Brenner, Gerry. *A Comprehensive Companion to Hemingway's A Moveable Feast*. Book I. Lewiston, New York : The Edwin Mellen Press, 2000.
3. Brian, Denis. *The True Gen : An Intimate Portrait of Hemingway by Those Who Knew Him*. New York : Grove Press, 1988.
4. Donaldson, Scott. *Hemingway VS. Fitzgerald : The Rise and Fall of a Literary Friendship*. New York : The Overlook Press, 1999.
5. Eby, Carl P. *Hemingway's Fetishism : Psychoanalysis and the Mirror of Manhood*. Albany : State University of New York Press, 1999.
6. Gladstein, Mimi Reisel. *The Indestructible Woman in Faulkner, Hemingway and Steinbeck*. Ann Arbor, Michigan : UMI Research Press, 1986.
7. Griffin, Peter. *Along with Youth : Hemingway, the Early Years*. Oxford : Oxford U.P., 1985.
8. Hemingway, Ernest. *A Farewell to Arms*. New York : Charles Scribner's Sons, 1929.
9. ---. *In Our Times*. New York : Charles Scribner's Sons, 1925.
10. Hemingway, Leicester. *My Brother, Ernest Hemingway*. Cleveland, Ohio : The World Publishing Company, 1962.
11. Kert, Bernice. *The Hemingway Women*. New York : W. W. Norton & Company, 1983.
12. Koster, de Katie. *Readings on Ernest Hemingway*. San Diego : Greenhaven Press, 1997.
13. Lynn, Kenneth S. *Hemingway*. Cambridge, Massachusetts : Harvard U.P., 1998.
14. Mellow, James R. *Hemingway : A Life without Consequences*. Reading, Massachusetts : Addison-Wesely Publishing Company, 1994.
15. Meyers, Jeffrey. *Hemingway : A Biography*. New York : Harper & Row, Publishers, 1985.
16. Oliver, Charles. *Ernest Hemingway A to Z*. New York : Checkmark Books, 1999.
17. Reynolds, Michael R. *Hemingway's First War : The Making of "A Farewell to Arms."* New Jersey : Princeton U.P., 1976.
18. Reynolds, Michael R. *The Young Hemingway*. New York : W. W. Norton & Company, 1998.
19. Villard, Henry Serrano, and James Nagel. *Hemingway in Love and War*. Boston : Northeastern U.P., 1989.